

顧客のニーズに「信頼とコスト」で 応えることにこだわる



4年越しの新施設実現

■ まずは、株塵芥センター（香川県高松市）の沿革、成り立ちからお聞かせいただけますか。

平尾 当社は1971年、廃棄物処理法の制定（1970年）に伴い設立されました。当初は、事業系一般廃棄物の収集運搬業務を主としていましたが、顧客からのニーズにより、産業廃棄物の処理分野に進出しました。廃棄物処理法ができるまでは、産業廃棄物という区分がありませんでしたので、事業者の方々も産廃の処理・処分に関する委託先を求めておられました。

そこで、まず77年9月、焼却処理施設を設置しました。次いで78年9月、安定型の西植田大石最終処分場（現・香川県高松市）、79年1月に管理型の西植田山田最終処分場（現・香川県高松市）を設置しました。さらに84年7月、第2号焼却処理

施設設置を追加設置しました。最終処分場は以降、85年4月の坂出府中一般廃棄物最終処分場設置（管理型）、86年4月の坂出府中産業廃棄物最終処分場設置（管理型）、そして現在も稼働中の下和田産業廃棄物処分場設置（香川県綾川町、安定型・管理型）を99年5月に設置しました。また03年6月には向坂産業廃棄物最終処分場（香川県高松市、安定型）を稼働させています。

■ 稼働中の最終処分場の計画埋立容量は、いくらですか。

平尾 下和田産業廃棄物処分場の安定型が12万6000m³で、管理型が20万5895m³です。こちらはグループ会社の株中部クリーンセンターが運営・管理しています。向坂産業廃棄物最終処分場（香川県高松市）は18万7925m³で、同じくグループ会社の（有）山栄開発が運営・管理しています。



下和田産業廃棄物処分場（香川県綾川町）

収運から中間処理、 最終処分までトータルに展開

■ 処理・処分のみならず、リサイクル事業にも力を入れておられますね。

平尾 はい、03年3月、破碎・選別・圧縮、RPF製造などリサイクル関連の施設を集約した「ジンカイ・リサイクル ファクトリ大野工場」（香川県高松市）を完成。09年7月には「ジンカイ・リサイクル ファクトリ水主工場」（香川県東香川市）も立ち上げました。こちらは、木くず及びがれき類の破碎施設を導入することで、自社処理でのリサイクル率を大きく引き上

げることに成功しました。

■ 中間処理・最終処分以外には、どのような事業を手掛けておられるのでしょうか。

平尾 事業系一般廃棄物、産業廃棄物の収集運搬のほか、工場ビッドなどの吸引・浚渫業務も請け負っています。

■ 収集運搬から中間処理・最終処分までをトータルに展開されていますが、そのなかで特に心がけておられる点は。

平尾 ライフサイクルアセスメントの側面から見ても、よりベストに近い処理・処分、再生利用を行えるよう、常にチェックしています。例えば、燃え殻、汚泥などは



左:ジンカイリサイクル・ファクトリ(香川県高松市大野)、右:ジンカイリサイクル・ファクトリの施設内

埋立て処分の方が、無理にリサイクルするよりも、エネルギー消費などを考慮するとライフサイクルアセスメント的には良いと思います。資源を消費しつつ、無理矢理リサイクル製品を造るのには違和感があります。

廃プラスチックの選別を行っています。異物の付着した塩ビ、複合物などは投入される労力、エネルギー、コスト、品質の面から判断し、埋め立てるのも出てくる。また、サーマルリサイクルの場合はエネルギー回収後、焼却残渣になってしまいます。しかし埋立てならば、再生利用困難な廃プラスチックなどは将来的に技術革新が進めば、リサイクルできる可能性もあるので、「資源を貯蔵している」との見方もできます。

■ なるほど、欧州でもドイツなどでは確かそのような「資源の貯蔵」という発想があったように記憶しています。さて、次に景気の話ですが、この落ち込みの中、取扱量への影響はいかがですか。

平尾 事業系一般廃棄物の取扱いはそれほど大きな変化はありませんが、やはり建設業、製造業で発生する産業廃棄物の集荷は、前年対比を割り込んでいます。今後、対策としては集荷体制改めて見直し、エリアごとに積替え保管施設を設けるなど、効率化を推進していく方針です。

■ 市場がシュリンクすると、ともすれば過当競争に陥りがちです。また、他業種からの新規参入も気になる場所ですが。

平尾 どの産業でもそうですが、景気の低迷により一層競争が激しくなっています。おっしゃる通り、近年は他業種からの副業的な新規参入相が増えています。そのほとんどが「少しでも儲けが増えれば」という安易な考えに基づいています。従って、本格

的な処理施設の設備投資をする気もなく、分別だけでほとんど処理できるようなものを安価に請け負うケースが多い。我われは専業であるがゆえ、価格競争はしたくないのですが、対抗するためには、よりきめ細かな価格設定が必要ではないかと思っています。例えば混載引き取り物の中で、マテリアルリサイクルできる物の買い取りを含めた価格設定するとか。

一方、景気低迷でセメント会社など大手企業の参入もあります。こちらへの対策は、幅広い受け入れ態勢を整え、小回りの効く収集運搬をアピールするとか、プラスアルファのサービスが必要になると考えています。

実情に応じた設備規模でイニシャルコストを下げる

■ 四国は、各県とも県外産物の搬入規制を行っており、他地域と異なる事情もあります。その環境下で実績を維持し、持続的拡大を図っていくために考えておられることは。

平尾 香川県は商圏が小さく、目立った大企業の排出事業所ありません。また、県外廃棄物の流入規制、原則禁止があるため、処理・処分を前提とした事業拡大は難しい状況です。また、処理単価に関しては、他の産業と同様、間違いなくデフレが進行していますので、ある程度の価格競争力も必要となってきます。しかし、闇雲に価格引き下げをすると、当然ながら収益の低下につながります。行きつくところ従業員の給与や福利厚生費の増減にまで影響を及ぼし兼ねません。従業員の士気の低下は、企業が前進する活力を削いでしまいます。だから、何としても避けたい。

幸い弊社は、長年この業界で仕事をしてきましたので、施設の償却はすでに終わっています。そのあたりを競争力に加味し、バランスよく経営判断を下していかなばなりません。どこまでも、顧客のニーズに対し「信頼とコスト」で応えることにこだわっていききたいですね。

■ 顧客ニーズという点で、どのような地域性に対応が必要と考えておられますか。

平尾 地域柄、産業規模の小さい排出事業所が多いため、排出される産業廃棄物は小ロット多品種であるのが特色です。よって、これまで一般的に言われてきた大規模施設によるコスト低減より、実情に応じた設備規模でイニシャルコストをできるだけ下げ、小ロットでも引取回数を多くし、顧客の利便性に応えられる設備投資が得策です。

収集運搬であれば、倉庫1つでもいいので各地域に拠点を設け、どれだけ敏速に対応し、運搬効率も向上させていけるかがポイントとなります。

環境機器分野への進出も計画

■ 他方、処理企業として積んでこられたキャリア、蓄積してこられたノウハウを活かした環境機器の開発など新規事業にも着手されています。

平尾 新規事業といっても、今に始まったことではありません。以前、弊社の浚渫・吸引事業の分野で「現場作業に即したハードを」との発想から、環境

整備機器メーカーの兼松エンジニアリング株(高知市)と共同で、大型の浚渫車を開発した経験があります。つまり、処理業者として「こんなハードがあれば重宝する」と思うものを形にしていって、それが機器の開発につながっているのです。

■ 昨年は、バイオマスエネルギーに関連した装置の開発にも着手されています。具体的な内容をお聞かせいただけますか。

平尾 小規模な事業所などに適する「小型木質バ

イオマス発電装置」の開発を広島県尾道市のメーカーである株東根製作所と共同で進めています。すでに開発済みのガス発生器を活用し、発電するもので、1日1t程度の木くずチップの使用を想定しています。小規模事業所でのフォークリフトの夜間充電、諸施設での非常用電源、バイオマスタウンなど地域完結型の利用などに適すると考えています。まだ開発途上ですが、最終的には木くずチップの貯留から連続投入設備、発電機までをパッケージングし普及させることを目標にしています。また、地球温暖化対策という面からは、カーボンニュートラル以上のCO₂削減をできるレベルに仕上げたいですね。

■ 実現すれば、処理業から製造業への進出。企業としての幅を広げるチャンスですね。今年の展開に期待しています。本日は、お忙しい中、ありがとうございました。NX



開発中の小型バイオマス発電機